

非常時の遠隔授業

——対面授業に近づける試み——

柳 光子

愛媛大学法文学部

Remote teaching during campus closure : Bringing E-learning closer to the classroom learning

Mitsuko YANAGI

Faculty of Law and Letters, Ehime University

はじめに

本稿は感染症拡大により全面的に遠隔授業がおこなわれた令和2年度前学期に筆者が本学で担当した7つの授業において、受講しやすさを最優先しつつ、教員と学生間の双方向性を担保すること、また受講生の孤独感・孤立感を緩和することを通して、教室での学びに近づける方法を模索し実施した記録と、それに基づく考察である。

【区分】 授業科目名	対象学年 登録者数	授業形態 備考
【共通教育】 文学入門	1-2 回生 105名	講義 約5割が1回生
【専門教育】 基礎フランス語1・2	1 回生 23名	初学者向けの語学 再履修者1名を含む
【専門教育】 フランス言語文化概論Ⅱ(昼)	1-4 回生 33名	講義 約5割が3回生
【専門教育】 フランス言語文化概論Ⅱ(夜)	1-4 回生 62名	講義 約6割が3回生
【専門教育】 フランス言語文化基礎演習Ⅱ	2-4 回生 16名	演習 約9割が2回生
【専門教育】 フランス言語文化専門演習Ⅱ	2-4 回生 13名	演習
【大学院専門教育】 フランス文学論研究	M1-M2 1名	講義+演習

図1 遠隔授業を実施した科目一覧

遠隔授業には多種多様な実施方法があり、それぞれ一長一短であることは言を俟たない。大混乱のなか数日で実施方法を決定し、ブレ授業をおこないながら2週間で本格的

に授業をスタートさせねばならない状況だったことから、理想的とはいいがたい形になった面もあるが、急ぎ学んだ技術も含め持てる力の限りを尽くし、骨身を削ってPCに向かい続けた日々の覚書でもある。急場を凌いだだけで終わらせず今後の教育に活かすため、記憶が新しいうちに振り返り、検討しておきたい。

遠隔授業を要した背景については説明するまでもないことなので省略し、新年度開始時に筆者が持ち合わせていた関連スキルと経験について述べたのち、授業科目と実施形態、その選択理由をまとめておく。個々の方法について、事例と利点・問題点を整理したうえで、受講生アンケートの結果も参照しつつ全体を振り返ってみよう。

1. E-ラーニングの実施経験

すべての授業を遠隔で実施せねばならないと決まった時点での筆者の能力および経験を振り返ると、能力面では前学期が終了した今も、何か新たに身につけたとまでは言えない。とてもそのような余裕はなく、持てる能力で何とか可能なことをするのが精一杯だった。Wordならば使い慣れているが、Excelは成績評価時に点数を計算する程度の使いしかできず、PowerPoint等も我流で稀に使うのみというレベルである。

ただ、主にフランス語教育でE-ラーニングを実施してきた経験だけは、幾らか有していた。平成26年度と28年度の「愛媛大学教育改革促進事業(愛大GP)」に採択され、E-ラーニング教材の開発や拡充に取り組んできた結果、1回生対象の「基礎フランス語」については、Moodleコー

スを設置し、受講生は毎回そこへアクセスして学習するという形が非常事態を迎える以前にできていた。コンテンツの大半は授業時間外の学習用であり、全面的な遠隔授業などという想定はしていなかったが、枠組みが既にあり、教室での授業部分をいかに遠隔で実施するかを考えるだけで良かったとも言える。さらに、ここ数年で試行した反転授業の経験があり、そのために作成した教材も少しは蓄積されていた。

その他の科目についても、時折 Moodle コースを利用した「メディア授業」¹⁾を実施した経験があった。業務の都合によりほぼ毎月、1週間の出張を繰り返すことになったため、特にクォーター制の授業では、補講で対処することが不可能に近く、これに代わるものとして「メディア授業」を実施していたのである。コンテンツを作成し、学習させ、達成度チェックの課題を提出させてフィードバックまで行うには多くの時間と労力を要し、教室での授業のほうがよほど楽だと感じていたので、毎回はこれに近いものになることを考えると暗澹たる思いに駆られたが、少なくとも教室に受講生を集めずに授業をおこなった経験はあった。

こうした過去の「遠隔授業」については独自のアンケート調査も実施しており、むろんフル遠隔授業ではないからこそその結果とはいえ、受講生からはおおむね好意的に受け止められていた。ネオ・デジタルネイティブ世代の学生た

ちならではの傾向だろう（ただし、スマートフォンしか満足に触ったことがないという者も文系では珍しくない）。このため、講義系科目にも E-ラーニングを積極的に導入することを目的に、令和2年度「愛大 GP」に新たなプロジェクトで応募することも予定していた²⁾。

これらの経験が既にあったことは、遠隔授業を実施するうえで非常に役だった。反面、未経験の方法を遠ざける結果になったと言えないこともないので、筆者の選択した方法がベストだなどと主張するつもりは毛頭ない。他の方法を試す余裕がなかったというのが正直なところで、下手に少しばかりの経験があるために新たな試みを拒否する気持ちになってはならないと自戒している。それでもやはり、多少の経験があったことには助けられた。経験はしておくものだと痛感すると同時に、今回の経験も、いつか何らかの役にたつよう努める価値があると感じた次第である。

2. すべての情報を Moodle コースに

全面的な遠隔授業と決まり、これまで使ったことなかった Zoom の講習会に参加するなど、急遽の対応に追われるなか、早くから決めていたのが「すべてを Moodle コース上に集約する」という方針だった。大量のメールが飛び交いはじめ、「Zoom ミーティングへの招待」を何通か受

【重要】土曜1限「文学入門」について

土曜1限「文学入門」に履修登録している皆さん、こんばんは、柳です。明朝に送信しようと思っていましたが、皆さんにおすすめしたい名作を紹介する E テレの番組が11日15時からアンコール放送されると分かったので、急ぎ連絡することにしました。遅い時刻の送信になってごめんなさい！

現在は「一斉休講」中ですが、本格的な授業開始に向けての準備期間でもあり、私も大急ぎで感染拡大防止のための授業の方法を検討・準備しているところです。

一昨日、少なくとも Q1 のあいだは4月22日以降も、愛大では遠隔授業しか実施してはならないことに決定したと発表されました。

そこで、皆さんには早急に、可能ならば今すぐに（あとで…とっていて忘れられると困ります！）Moodle にアクセスし、この授業のコースに設置されているコンテンツを参照のうえ、アンケートに回答してください。回答の最終期限は14日正午です。これは単なるアンケートではなく、この授業を本当に受講する意志があるかどうかを確認するためのものでもあります。そのため、誰が回答したかが分かる「テスト」形式にしています。

期間内に履修登録した皆さんは、自動的にコースに登録されているので、Moodle ポータルからログインすると、「マイコース」にこの授業のコースが表示されるはず。なお、2回生以上の皆さんが昨年度まで使っていた Moodle3 はサービス終了し、Moodle3.5 に移行しています。全員、Moodle ポータルから 3.5 のほうを選択してください。

<http://moodle.ehime-u.ac.jp>

もしも「マイコース」に本授業のコースが表示されない場合は、こちらで手動登録しますから、その旨をただちに連絡してください。その他の質問や相談も、まずはメールで受けつけますが、ひとつ注意点ががあります。

目下こうしたメール連絡が一斉に行われているため、システムがパンクすることが懸念されています。それを回避するために、私へのメールはこの修学支援システム上での「返信」をするのではなく、直接、yanagi@ehime-u.ac.jp へ送信してください。

また同じ理由で、今後この授業についての連絡は、緊急の場合を除き、Moodle コース上でおこないます。少なくとも週に1回、チェックをお願いします。毎週の授業の「予習」をするタイミングでチェックする習慣をつけておくとよいでしょう。

それでは、Moodle3.5 のコース上でお会いしましょう！【柳】

図2 修学支援システムを介した最初の案内メール

け取ってみると、慣れている筈の筆者でさえも、後から必要なメールを見つけ出すのに苦労した。多数の授業を受ける学生たちが大混乱に陥ることは目に見えている。メールサーバがダウンするかもしれない、修学支援システムを介して発信したメールがすぐには届かないことがある、といった声も聞こえはじめていた。

そこで、授業開始に先立つ「プレ授業」——休講となった2週間の間に非同期型で2回ずつ実施し、授業のウォーミングアップとなる学習を課した——の一環として、受講生全員にメールを出し、Moodle コースにアクセスするよう促した。図2は共通教育科目に登録していた100余名への修学支援システムを介した通知で、1回生が多数を占めていたため、くどくどと書きすぎた感があるが、迷子になる学生を出さないようにと願った結果である。また、授業開始までの間に受講の意志ある者が全員、Moodle コースに辿り着いたことを確認するためでもあった。

こうしたメールを授業ごとに送信し、マンツーマンの授業となった大学院の授業を除くすべての授業において、Moodle コース内に設けた「アンケート」で、受講生たちが使える機器、Wi-Fi 環境などについて調査すると同時に、質問や相談を受けつけるようにした。その結果、予想以上に恵まれた環境にある学生が多いことが判明した一方で、Wi-Fi が使えない、スマートフォンしか持っていない、という学生も一定数いた。国内通信キャリア大手三社による遠隔授業支援サービスや、大学からの機器貸与のおかげで、授業開始までにどうにか全員が問題解決したように見受けられたのはたいへん幸運なことだった。

これらの状況を確認したうえで、実施方法が意に沿わない場合に受講生が他の授業に変更できるようにするため、履修登録期間内に授業実施方法を仮決定し、通達した。受講生数の多い科目では、アンケートに答えてこない学生やコースにアクセスした形跡すらない学生をあぶり出し、個別にメール連絡をとる作業にかなりの手間暇がかかってくる。そこへ科目等履修生の申込みなどが加わってくると、本学のアカウントがまだ発行されていない受講希望者に対応しなければならず、負担感が倍増した。むろん今回は仕方のないことではあったのだが、緊急時には単位互換制度の一時停止などを予め組み込んだ制度にしておくことが必要ではないかとまで感じた。

こうした作業を経て、授業に関する情報は Moodle コース上に集約されていること、Zoom など他のツールを使う場合も、その案内リンクは Moodle コース上に貼られることを周知した。Moodle サーバのトラブルも懸念されたが、メディアセンターの努力が奏功し、大きなトラブルがなかったことは、遠隔授業が曲がりなりにもスムーズに実施された大きな要因であった。

受講生には、Moodle にアクセスできないなどの障害が発生したときは、発生した日時や復旧した日時も含め、教

員にはただちに情報が入るため、連絡の必要はないこと、通常はそこまでしないが必要な場合には受講生のログを確認可能であることを伝え、極力「コースに入れませんでした」といったメールのやりとりが減るように努めた。また授業開始後は、原則として1週間前までに、次回の実施形態等をコース上に記載することにした。

3. 主軸は同期型

こうして「プレ授業」を Moodle コース上で実施する傍ら、本格的な授業をどの形態でおこなうのかを急ぎ決定しなければならなくなったが、同期型か、非同期型か、この決定は比較的早かった。一長一短であることは自明だったが、筆者が目指した「できるだけ通常の授業に近づける」ことを実現するには、同期型が適していると予想されたからだ。

これまでに実施した「メディア授業」では、1週間の期間内ならばいつ受講してもよいという設定にしていたが、期限まぎわに慌てて受講する者が多く、それによる弊害もあった。また学生にとって、遠隔授業が長く続く以上、規則正しいペースでの受講が教育上は望ましい筈だ。

Zoom のブレイクアウトルーム機能や、後述するリアルタイム型アンケートシステムを使えば、「クラスメイト」との意見交換の場を設けられるのではという期待も持てた。自宅で黙々と課題に取り組む授業にも、適切な指導が伴えば大学生にとっては大きなメリットがある筈だが、少しは「教室」の雰囲気味わえる授業があったほうがよいだろう。教員側の都合としても、7つの授業を同時に走らせている状態ならば、受講可能期間は短いほうが管理しやすい。こうして早い段階で「同期型の授業を原則とする」決心がついた。

4. 受講生数の少ない語学・演習系は Zoom 中心

同期型の実施方法としては、内外の講習会に参加して使い方を教わったばかりの Zoom アプリが、もっとも使いやすく便利であるように思われた。データ量を気にせず機器類を使える学生ばかりではないため、データ通信量が少ない割に音質が良いという理由で、ほぼ迷う余地はなかった。ただし、いきなり受講生が全員、初回から迷わず使えるかどうかは疑問である。2回生以上ならば友だち同士で練習することもできるので、使い方を説明し、できれば自分で「ミーティング」を開いて練習しておくようにと奨めた。招待されて参加するよりも、自分が開催する側に回り、試してみるほうが諸機能を理解しやすいことを実感していたからだ。しかし親元を離れて一人暮らしを始めたばかりの1回生には難しいかもしれない。

そこで、1回生対象の「基礎フランス語」初回では、スクリーンショットを交えた事前の説明に加えて、練習用の「ミーティング」を設定しておき、授業終了後に任意参加する練習会を設けた。6割ほどの受講生が参加し、授業とは直接関係のない「いま困っていること」を自由に話すなど、交流の場にもなった。一斉休講の分を取り戻す必要上、頻回には実施できなかったが、正規の授業内でもブレイクアウトルームに分かれて、「フランス語での自己紹介のあとは5分間、日本語で情報交換してもよい」という時間を設けたのも、もしも孤獨な1回生がいたら、知り合いをつくるきっかけにしてほしいという思いがあったからだが、教員は居合わせないほうがよいと考えて巡回することは避けたので、奏功したかどうかは定かではない。

なお、データ量を抑えるためにも、プライバシー保護のためにも、学生には原則としてカメラ・マイクともオフで参加させるようにした。教員はなるべく画面共有により資料が映っている状態にはしたが、カメラは常時オンとした。相手の反応がまったく分からない状態で一方的に話す経験は乏しいため、当初は無駄に力が入ってしまい疲労困憊したが、次第に慣れた。学生たちにも、少人数のグループに分かれて会話するときや、準備してきた「発表」をおこなう際には、カメラをオンにしたほうが意思疎通しやすい、マスク着用はしたままでも構わないと伝えたところ、短時間であれば進んでカメラをオンにしてくれるケースが多かった。少人数の演習やゼミでは、主に初回、自己紹介の時間を設けるのでカメラをオンにできる状態で参加してほしいと予告しておく、終了時には「どんなメンバーなのか分かって安心した」という声も聞かれた。

Zoom 授業には、回を重ねるうちに学生も安心して参加するようになっていったことが各回の終了時コメントから窺われた。好きこのんで利用するかどうかはともかく、就活などでも活用されている現状から、いずれは慣れるしかない、と受け入れてくれた面もあるのだろう。むろん絶対にしてはいけないと注意はしたが、たとえば勝手にスクリーンショットを取られても分からないので、カメラはすべてオフにしておくのが無難ではある。しかし学生も教員も音声のみで通すと「教室」の雰囲気とはますますかけ離れてしまう。少人数の授業ならば、参加時に表示される名前を予め決めておいた番号に変更させておくなどの方法も、試してみたいところだ。

なお、マンツーマンとなった大学院の授業「フランス文学論研究」では Zoom のみを用いたが、「基礎フランス語」ならびに「フランス言語文化基礎演習」、「フランス言語文化専門演習」では、受講生のレベルに応じて取り組み内容を変えることや、ディスカッションの内容が文章として残ることが有用と思われる場合に、Moodle による非同期型の授業も実施した。

たとえばゼミ生およびゼミ所属を希望する2回生のみが

⑥5月26日の授業

受講可能期間：5月19日（火）5限 Zoom 使用。

必要に応じてカメラをオンにできる状態で参加してください。

16時～16時20分の間に本 Moodle コースに参加を済ませておくこと。

16時20分から Zoom 授業を開始します。遅刻厳禁です！🙏

 当日の参加はここから！

 『J'en ai marre!』

 コメント提出

📅 5月26日（当日）19時まで

 復習&練習問題（否定文）

 復習（have動詞）

 特殊文字の入力方法（Mac & Windows）

 スマートフォンでの特殊文字の入力方法

 オススメ名作ご紹介

図3 「基礎フランス語」の Moodle コース

受講する「フランス言語文化専門演習」で「フォーラム」（多様な設定が可能な掲示板機能であるが、匿名での投稿はできない）を使って各自が発表をおこない、全員がコメントを「返信」することを課してみたが、見事に全員が様子見する結果となった。期限の直前まで誰もコメントをつけず、ようやく一人が返信に踏み切ると一斉に皆が後に続く。それなりに有意義な意見交換の場にはなったものの、当たり障りのないことのみ書く傾向も見られた。訓練次第ではあるだろうが、学生たちにとって匿名性のない形で意見を表明する課題は、気心の知れたグループ内ですらハードルが高いことが分かる。

Zoom 授業の終了時には毎回コメント提出を課し、「特になし」としか書かれていない場合を除き、次回までに一つ一つコメントを返した。挨拶レベルのやりとりも多かったが、個別に向き合っていることを少しでも感じ取ってくれるだけでもよいと考えることにした。30名以下の授業ならば何とか可能な作業であり、Zoom 授業の場合、対面授業で用いる筈だった教材に少し手を加える程度で準備が終わることが多いので、終了後に生じるこの作業はさほど苦にはならなかった。

5. 受講生数の多い講義系科目は組み合わせ方式

慣れればスムーズに実施可能な Zoom 授業だったが、それは比較的人数の少ない授業の場合である。受講生数が多いと管理しづらく、トラブルも起きやすいことから、講義系科目に向いているとはいいがたい。「フランス言語文化概論」が33名、同名の夜間主授業は62名、共通教育「文学入門」は105名が登録していた。さらに「文学入門」では、

聴覚障害のある学生への合理的配慮が求められていた。毎回の授業準備が直前にならなければ終わらないことは目に見えている。そのうえ字幕をつけるために教材を2週間前までにバリアフリー推進室に提出する、などということができない筈がない。公平を期するために音声を伴う教材をゼロにすれば、シラバスとの間に齟齬が生じてしまう。当初は無理難題としか思えなかった。仕方なく、文字通訳者を手配するほかないだろうという結論で問題をいったん棚上げし、受講生数が多くて円滑な授業を実施するにはどうすればよいかを模索することにした。

Moodle コース上に解説のコンテンツを置くことならば慣れている。しかし、文字情報が中心で、多少の画像が添えられている程度で、受講生は満足な学習ができるだろうか。コースにアクセスはするものの教材を真剣に閲覧しない学生が一定数いるような気がする。何よりも、教員の存在を感じられない授業になってしまうだろう。顔見知りの学生が多い2回生以上向けの授業とちがって1回生が大半なので、どんな教員なのか分からず不安な受講生も多いに違いない。とりあえず「プレ授業」のセクションに顔写真つきで「この授業について」の説明を置いてはいたが、むろんそれだけでは不十分だ。

そこで、動画教材を作成する案が浮上した。経験は皆無だったが、何とかなりそうではある。授業の一部に「視聴」させる教材を用いれば、少なくとも教員の肉声を聞きながら受講生は学ぶことになる。データダイエットの必要性と、受講生に勝手にダウンロードされては困ることから、ナレーション付きのプレゼンテーションを作成し、ムービーとして書き出したものを YouTube に投稿する方法が良さそうだと目星がついた。Moodle 上にリンクを貼り、「限定公開」しておけば第三者が閲覧することも防げる。

YouTube への投稿はおろか、ムービー作成、それ以前にスライドにナレーションをつける作業すら筆者は未経験だったため、どうにかテスト投稿に漕ぎ着けたとき、自動で字幕作成する機能が無料で使えることを偶然に知って驚愕した。これなら聴覚障害の学生も、字幕を表示する操作をして動画を再生するだけでよい。ただし、AIによる文字変換は想像を超える精度でなされるが、おのずと限界はある。固有名詞は当然として、普通名詞も思いもよらぬ同音異義語に変換されることがあり、気づいても修正する時間はない。放置するには忍びない思いはあったが、無理なものは無理であるし、一般の学生にとってもそう聞こえる可能性があるのだと考えれば、むしろ「公平」とも言えるのだと自分を納得させることにした。

こうして必要に迫られる形で受講生数の多い講義に動画を用いることを決断してみると、幾つかの方法を組み合わせる形式が、講義系科目には向いているのではないかとの考えに至った。我々がしばしば受講する教職員向けのオンライン講座でさえ、長時間受講していれば注意力が低下し、

⑥5月26日の授業：フェヌロン

受講可能期間：5月26日（火）4限

「スグキク」を用いたリアルタイム型授業を実施します。14時15分～14時30分の間に本 Moodle コースへのアクセスを済ませておいてください。

- 本日の出席登録
- ①本日のメニュー
- ②前回投稿された質問への回答
- ③「スグキク」への参加はここから！
- 14時40分～14時55分
- ④⑤背景解説（動画）
- ⑥-①(1)フェヌロン（1651-1715）聖職者の道
- ⑥-②(2)フェヌロン（1651-1715）王子の教育
- ⑥-③(3)フェヌロン（1651-1715）カンブレーの白鳥
- ⑦「スグキク」への参加はここから！
- 15時40分～16時
- コメント投稿（質問がある場合のみでOK）
- 受付のめ切：5月26日（本日）16時30分
- 次回用の教材ダウンロードはここから！

図4 「フランス言語文化概論」の Moodle コース

理解度テストが控えていなければ聞き流してしまいかねない。遠隔授業を並行して幾つも受講する学生たちに集中力の維持を常に求めるのは酷というものだろう。教員としては、真面目に受講した学生と、形だけの受講で済ませた学生とを区別する必要もある。

そこで各回の授業を以下の組み合わせにより、同期型として実施することにした。

受講生の取り組み内容	所用時間
①出席登録とメニュー確認	5分
②前回の質問への回答などを閲覧	5分
③コメント投稿（作品の抜粋をきちんと読んだかどうかの確認）	15分
④文学作品の「背景」解説動画（10～15分の動画2本）視聴	30分
⑤作者や作品についての解説を閲覧	15分
⑥コメント投稿（きちんと受講したかどうかの確認）	20分
⑦質問がある場合は Moodle 上に投稿	（時間外）
⑧次回用の作品の抜粋をダウンロード	（時間外）

図5 平均的な講義1回分のスケジュール

6. アンケートシステムの活用

講義科目3つで予想以上に受講生から好評だったのが、リアルタイム型アンケートシステム「スグキク」³⁾の利用である。参加者が匿名性を保ったままコメントを投稿でき、他の参加者のコメントを読んだり、賛否を表明したりすることも可能なツールだ。筆者は平常時から「コメントカード」代わりに講義系科目で使っていた。100名前後の授業ともなると、紙媒体では配付するだけで時間がかかるうえ、整理するにもひと苦労だからだ（ただし、必ず紙のカードも用意し、手書きでの提出も可としていた）。このため授業終了時の5～10分で質問や感想を書かせるのが常で、こちらで内容を整理して次回に紹介したり、質問に答えたりするという使い方であり、自分以外の受講生の投稿を参照することは求めてこなかった。

投稿者の氏名等が表示されない設定にしても、実施者は後から投稿者を識別できる点も、このツールの便利なところだ。遠隔授業では、何しろ受講生の反応が分からないため、授業開始後と終了前の2回に分けてコメントを投稿させ、予習ができているか、授業をきちんと受講したかをチェックすることにした。予習チェックとしては、単に作品の感想を書かせるだけでなく、戯曲であれば記憶に残った台詞を挙げさせるなど、毎回少しずつ内容を変えた。終了時は原則として「授業全体や作品についての感想」を書かせたが、初回に「授業をちゃんと聞いていましたよ、とアピールしてください。そこを点数化します」と宣言しておき、実際に、受講せずとも書けるような内容しか書かれていなければ容赦なく減点した。

ある意味で意地悪なチェックをしたとも言えるわけだが、驚いたことに「他の人の感想や意見を見ることができて嬉しい、勉強になる」という感想が数多く見受けられた。通常よりも長めの時間を設定したほか、授業終了後も30分くらいは閲覧のみ可能な状態にしておいたため、他の学生の投稿に目を通すことができたのだろう。「一人で遠隔授業を受ける孤独感が和らぐ」という声もあった。平常時のように教員側でコメントを整理しフィードバックするだけの時間がなかったというのが実情なのだが、学生たち同志で意見を参照しあうという形になって、かえって良かったことになる。

この反応を見て、概論の授業で中間・期末レポートの一部を、このツールを介した「発表会」形式にしてみたところ、非常に喜ばれた。学生たちが大量の課題に疲弊しているらしいと知り、目先の変った課題を与えたことも原因だったと思われるが、学生たちは戸惑いながらも大いに楽しんで取り組み、また熱心に他の受講生が提出した力作を鑑賞していた。誰の投稿であるのかは教員にしか分からないため、「恥ずかしくないの思い切って発表できる」、「人に見られるという緊張感をもって取り組めたので良かった」

といった感想も数多く寄せられた。

なお、このツールはコメントに対し Good / Bad 評価をつけられる仕組みになっており、個人的にはこれを使用しない設定を選ぶことができればよいのにと常々思っていた。Good はともかく、自分の意見に Bad をつけられれば傷つき、怖くなるだろう。仕方ないので「私としては意見に「賛成／反対」ならばともかく、「良い／悪い」とは言って欲しくないのだが、これを表示しない設定にはできないので、どうか良識ある使い方をしてほしい」と要請することにした⁴⁾。また、実際にありがちなことだったため、「スクロールしていて意図せず Bad ボタンに触れてしまったときは、もういちど触れれば消すことができる」ともたびたび伝えたとこ、むやみに人のコメントをけなすような行動はほとんど見られなかった。「発表会」のときだけは、素晴らしいと思った投稿に Good をつけることを推奨したが、教員は作品をどれほど理解できているかを基準として評価し、Good をたくさん集めたかどうかは参考にしない、と明言しておいた。

7. 負担の重さ

以上が筆者の担当した前学期の授業概要であるが、7つの遠隔授業を実施した第1クォーターの間、たまに買い出しに出る以外は自宅に閉じこもり、早朝から深夜までPCに向かう日々で、満足に寝る時間も食事をする時間もなかった。第2クォーターになると負担の大きい講義系科目が1つ減ったのでだいぶ楽になったが、それでも週末を含め、満足に眠れた日は皆無に近く、もういちど同じことを課されてやり通せるかどうかは自信がない。幸いにも無事、予定通りに授業を完了することができたが、放送大学の面接授業やフランス語検定試験の実施責任者など、引き受けていた仕事が相次いでキャンセルされたことに救われた面もあった。大学教員としては恥ずかしいことと言わねばならないが、自分の研究活動もほとんどできないままに終わってしまった。あるべき姿であったとはどうい言えず、何とかして遠隔授業の効率化を図るべきだったと反省させられた。

負担に喘ぎ、巷で「遠隔授業で教員は楽をしている」などと言われているのを耳にして憤慨しつつも最後まで続けられたのは、予想に反して大半の受講生が極めて真面目に授業を受けてくれたからだった。まず遅刻や欠席が非常に少なかった。定刻の20分前から Moodle コースのコンテンツを利用できる設定にしておいたが、直後にアクセスしている学生が2割ほどいるのが常で、遅刻者は通常の授業よりもずっと少なかった。受講しなかったことを人のせいにしてしようとする学生や、特別扱いを求めてくる学生も減多におらず、いても公平性を保てなくなることを理由に拒否すれば、納得してくれた。黙っていれば見逃されるかもし

れないものを、正直に「欠席してすみませんでした」と申告してくる学生すらおり、本学の学生たちへの信頼感が増した。教員の姿が見えにくい遠隔授業ではあるが、それでも学生たちが教員の努力を感じ取ってくれたようにも思われた。

8. アンケート結果

実際に受講した学生たちの反応については、Moodle 上での匿名アンケートを実施したなかで、最も受講生数が多かった「文学入門」での結果を一例として挙げておこう。通常の「学生による授業評価アンケート」が実施されないことを知って急造したアンケートであり、かなり多くの項目を設定していたが、最終回に出席した 90 名のうち 75 名が回答してくれていた。

「この授業は受講しやすかったと思いますか？ 内容が難しかったかどうかではなく、遠隔授業としてスムーズに受講できたかどうかを教えてください」という設問に対しては、次の回答が得られた。

「非常に受講しやすく、最初からほぼスムーズに受講できた」：48%

「最初は戸惑ったが、慣れたらスムーズに受講できるようになった」：45%

「それほど困難はなかったが、たまに受講しづらいことがあった」：7%

「受講しづらいことが何度もあった」：0%

「ほとんど毎回、スムーズには受講できなかった」：0%

続く設問での自由記述で「確認を怠って初回の授業を受け損ねたが、次からは確認するようになった」、「資料の字が小さくて読みづらいことがあった」などがスムーズに受講できなかった具体例として挙げられており、Moodle コースや授業実施形態に直接起因する問題はほぼなかったと見てよさそうだ。

「この授業の内容は期待に添うものでしたか？」に対しては、以下の回答が得られた。

「期待以上の内容だった」：58%

「ほぼ期待通りだった」：39%

「やや期待はずれだった」：3%

「かなり期待はずれだった」：0%

少なくとも回答してくれた受講生の場合、満足度は高かったと言えるだろう。

自由に意見や感想を入力するよう求めた設問では、リアルタイム型の実施形態、アンケートシステムの使用、動画教材を評価する声が目立った。

「オンライン授業で不安だったが、ちゃんと授業の手順が示されていたので迷うことがなく授業を受けることができた」、「Moodle 上で順を追って学習できるようにしてあり、操作しやすかった。出席登録のところにも一言添えてあったり、スグキクの時間を赤字で記してあったりと、先生の細やかな配慮が感じられて嬉しかった」、「一気に閲覧可能になるのではなく、タイムスケジュールが設けられていたため、集中力を欠くことなく授業を所定の時間内に済ませることができ、受講している遠隔授業のなかで一番快適な授業形式だった」など、ある意味では自由度の低い設定をむしろ快適と捉えた受講生が多く、好きなときに受講できるほうが良かったという声は皆無ではないにせよ、非常に少なかった。

動画教材を歓迎する意見としては、「動画教材による背景解説は、対面授業と比べても遜色なく受けることができ、むしろ聞き逃した情報は聞き直せたので、対面授業で聞きづらい席になるよりも確実に内容を受け取れたと感じた。先生の話方も簡潔で分かりやすかった」、「先生自身の声での解説があったので、対面授業に近い形になってよかった」などがあり、最も手間暇のかかった教材だったが、せめて肉声を交えることにより教員の存在を感じてほしいとの思いで作成し続けた苦勞が報われた気がする。

改めて驚かされたのが、リアルタイム型アンケートの利用に対する高評価だった。設問には知恵を絞らねばならなかったが、授業実施時は所定の時刻に開始し、トラブル発生がないかを見守り、定刻に終了する操作をするだけで良かったので、受講生は手抜きと感じるのではないかの危惧もあったのだが、これが良かったという記述が非常に多かったのである。

「他の人の意見が見られるスグキクは非常に面白かったし、勉強になった。大学の授業は、課題を提出して終わり、意見を投稿して終わり、というものが多く残念に思っていたが、スグキクだと他の人の意見と比較し自分の意見の特徴を知ることができるので、学習方法として効果的と感じた」、「スグキクのおかげで Zoom などの同期型授業よりも活発な雰囲気だった」、「他の受講生の意見をリアルタイムで知ることができて、自分の考えを深めることに繋がった」、「多くの人と一緒に講義を受けているという感覚になるので、集中して受講できた」、「教室での授業以上に、多くの人の意見を閲覧できる気がした」などの記述から、学生たちがこちらの想像以上に「机を並べる仲間」の存在を求めていること、他者の意見に耳を傾け、それを糧として思索を深めようとする意欲を持っていることが伝わってくる。

他にも「動画教材や Moodle の解説など、コンテンツがさまざまあり、作品について深く理解することができた」、「まず事前の資料を読んだうえでのコメント投稿があり、それから解説を見て、改めて感想を投稿するという流れが、

自分の考えを深めることができるようになって良かった」と授業内容の組み立てや教材の多様性を評価する意見や、「解説のなかに遠隔授業ではほとんど聞くことのできない豆知識や雑談的な要素があって、大学の授業という感じがして嬉しかったし、楽しく受講できた」、「Moodleの先生の文章が親しみやすく、遠隔でありながら目の前で授業を聞いている気持ちになった」とまさに教室に近い雰囲気を求める記述があり、筆者が方針とした「教室での授業にできるだけ近づけること」を受講生側も望んでいたと言えそうな結果として、安堵しつつ受け止めることができた。

全面的な遠隔授業は非常手段であり、通常ならば対面授業こそあるべき形なのだが、遠隔授業ならではのメリットもあり、その多くが平常時にも活かされうるものであるように思う。動画教材の蓄積があれば、反転授業用の教材として用いることは容易であり、解説を無駄なく効率的に済ませることで浮いた時間を意見交換に回すことも可能になるだろう。匿名性を保ったまま教員の目は行き届くという投稿システムは、発言することへの敷居を低くしてくれる。他者の声に耳を傾け、自らの糧にしたいという気持ちが学生たちにあるのならば、その体験をさせることには少なからず意味があるに違いない。

学生も教員も大変な目にあったフル遠隔授業は、「二度と経験したくない」で片付けては勿体ない貴重な実験だったとも言えるだろう。何かしら今後の教育に活かすことで、この体験を無駄にしたくないものだと痛感する。渦中にあるときには何か新たな方法を考えたり、人に教わったりする余裕はなくなってしまう。振り返る余裕が生じたときにこそ、改善に向けてアンテナの感度を高めておきたい。

註

- 1) 平成25年2月20日教育学生支援会議決定の「愛媛大学における『多様なメディアを高度に利用して行う授業』の実施等に関する申合わせ」により規定された授業。シラバスへの掲載をはじめ「メディア授業」が成立するための条件を定めたガイドラインも策定されている。
- 2) 愛大GPには予定通り応募したが、直後に中止が発表された。やむを得ずプロジェクトを見直し「『基礎フランス語』ならびに講義・演習系専門科目で効果的な授業を実施するためのE-ラーニング教材の開発」として法文学部の戦略経費に応募したところ、幸いにも採択されたおかげで、さほどの不安なく機器類を酷使できている。
- 3) アンケートの作成ツールは「イマキク」、参加用のツールは「スグキク」と呼ばれており、筆者は「イマキク」S+プランを購入している。
- 4) 本稿の校正中に「イマキク」のコメント評価機能について照会したところ、設問ごとに評価ボタンの非表示設定や文言の編集をする機能が2019年に加えられていたことが判明した。今後はこの機能を用いることで、より活発な意見交換の場を提供できるよう工夫したい。